

文化・芸術

「自画像」

1943年ころ、油彩・板
27・3センチ×22・2センチ

松本竣介（1912〜48年）

自画像とは、鏡の中に写った自身の姿を描くものです。デューラー、レンブラントをはじめ、画家は古くから自画像を描いています。とりわけ個人の意識、あるいは芸術家としての自覚がたかまる近代になれば、膨大な数でしょう。

それは、鏡の中の自分の顔が、最も身近なモデルという理由からだけではないでしょう。自分さがしであり、自己表現でもあります。一度描けば、それだけでつづくというものではないのです。「自分とは、いったい何だろうか?」、まさに答えがないから、何度も描くことになります。

松本竣介も、「立てる像」（1942年、神奈川県立近代美術館）などの大画面の全身像や素描をいれると、実に多くの自画像を残しています。そのなかでも、この自画像はすこし異色です。見るもの（つまり自身であり、鑑賞者）と視線をかわすことなく、横を向いているからです。視線のむこう側に、何をさがそうとしていたのでしょうか。アトリエのなかの孤独だが、充足した時間の流れを想像したくなります。

（田中）

名画の扉

大川美術館常設展示から

